

神泉苑しんせんえんは御池をいけ通大宮のみやの西にあり。〔真言宗にして東寺法菩提院ほだいみんに属す〕善女龍王社ぜんによりうわうは池の中島にあり。〔例祭は八月朔

日なり〕二重塔は大日如来を本尊とす、池を法成就池はふしやうじゆいけといふ。むかし大内裏の時は、封境広大にして天子遊覧の地なり。

〔拾芥抄に曰、二条の南大宮おほみやの西八町、三条の北壬生みぶの東云々〕池辺には乾臨閣けんりんかくを営て、近衛次将こんゑのじしやうを別当職とし、庭中に

は巨勢金岡石を置て風光を貯ふ。守敏は諸龍を咒して瓶中に入。弘法大師こうぼうは天竺無熱池ぜんによりうじんの善女龍神を請じ、天下旱魃の

愁ひを扶て、叡感を蒙り、小野小町をのこまちも和歌を詠じて雨を降し、鸞は宣旨をうけて羽を伏蹲れば、官人これを安くと捕

しむ、帝御感のあまり五位の爵を賜りしも此所なり。又白河院御遊の時、鵜をつかはせて叡覧あるに、鵜此池中に入て

金覆輪の太刀を喰ふて上りけり、是より銘を鵜丸といふ。崇徳院しゆとくゑんに伝り、六条判官ろくでうのはんぐわん為義ためよしに此御剣を賜りける。祇園會

もこゝに始り。弘仁三年には嵯峨帝さがてい此苑中に於て花の宴あり、是花宴の始なり。本朝文粹みなもとものしたがつに源順みなもとが曰、神泉苑しんせんえんは禁苑

の其一なり、紅林地広うして楚夢を胸中に吞、緑池水高うして呉江ごかうを眼下に縮むと書り。星霜漸累り、遂に建保の頃よ

り荒廢に及ぶ、承久の乱後には武州ぶしうの禪門築地を高うし門を堅て修造ある、其後又あれて旧跡幽なりしを、元和の頃筑

紫しの僧覺雅そうかくがといふ人、官に申て再興し、真言の靈場となす。北野右近馬場きたのうこんのばば此神泉苑等しんせんえんとうは、纔なりといへども是大内裏の

遺跡なり。

年中行事寄合

ちはやふる神の泉のそのかみや花をみゆきの初め成けり

家時